

わかり合える楽しさ～国際交流の経験から～ The Joy of Mutual Understanding: Experiences from International Exchange

石田 尚之*
Naoyuki Ishida



この巻頭言の締切の直前に、ある国際学会に出席していたこともあり、ふと自分の国際交流の経験を綴ってみようと思いついた。本来ならば巻頭言は大所高所からの意見や提言を書く場なのだろうが、そのような立場にあるわけでもない筆者としては、経験談でも語ってみるのが身の丈の寄稿であろうと考えた。

海外志向は強い方だったと思う。博士課程に進学する前に、どうしてもアメリカに留学して学位を取りたくなくて、英語を猛勉強した。今ほど情報もない時代だったので、英語さえできれば行けるはず、と大きな勘違いをしていたこともあり、結局その夢は叶わなかった。それでは、と博士学位取得後に海外ポスドクを熱望したのだが、修了ぎりぎりでは何とか学位を取れた身には、受け入れ先がすぐに見つかるわけもなく、恩師東谷公先生に一喝されて日本での就職を決めたものだった。就職後は、しばらく留学などとは無縁の生活をしてきたが、このままでは年を取り過ぎると、上司に直談判して了承を取り付け、イギリスに1年留学したのは30代も半ばの頃だった。上のような経緯で英語は勉強したので、そこそこ自信はあったのに、最初はボスの言うことが聞き取れず、“Pardon?”を連発していたら、「研究の前に、英語を何とかしろ」と言われ、悔しく情けない思いをした。そこで一念発起、英会話教室に通い（イギリスにいるのに！）、とにかく研究室の面子と日常のコミュニケーションを欠かさずとるようにし、飲み会やパーティーには必ず顔を出し、と1年やっていたら、何とかかんとかそれなりにコミュニケーションが取れるようになったのだ。期間の最後の方に、ボスにふっと「お前はもうここの人間だ」と言われた時にはそれはうれしかった。

しかし、多少ながら英語が使えるようになって、それでめでたし、ではなかった。東谷先生の主宰されていた国際交流プロジェクトに参加して、先生が外国人研究者をドカンドカンと爆笑させているのを見て、よし自分もそうやってやろうと思ったのが運の尽き。中身の伴わない人間が、付け焼き刃で真似をしても、格好を付けて肩に力が入りすぎ、すぐに話は尽き何をしゃべればいいのか分からなくなって、仲良くなろうにも相手がさっさと目の前から去って行くことばかりで、悲しくなることも多かった。身の程知らずに大先生に突っ

込んでいって、素っ気なくあしらわれたことだって少なくない。そうすると生来の内気さ（いや本当に）と自意識過剰が頭をもたげ、せっかく国際学会に行っても、外国人とコミュニケーションをとることが億劫になり、ホテルに引きこもってしまったり、東谷先生に「何やキミは、元気ないなあ！」とどやされることもあった。

それでも懲りずに国際学会やプロジェクトに参加しているうちに、幸い親しい友人もでき、年齢も上がっていけばあまり肩肘を張らずともコミュニケーションができるようになって、いつもの学会に毎度の顔なじみも増え、それなりにリラックスして過ごせるようになってきたのは本当に最近の話。楽しいことも数えきれずあったのだが、ずっと心に残っているのは上に挙げたような、悔しい、情けない思いをしたことばかりである。

それでも国際学会や交流プロジェクトにいつもいそいそと出かけていたのは、いったいなぜだったのだろうか。月並みだがそれは、「通じること」の楽しさであろう。相手の研究を分かること、自分の研究を分かってもらうこと。相手を知る、自分自身を分かってもらうこと。とりわけ不自由な言語で、まったく異なる文化や価値観をもつ相手と向き合うとき、自分という人間のすべてが試されているような気さえする。頭をフル回転させ、時には感情をすり減らしながらも、わかり合えたときの喜びは格別だ。たとえ拙くても、生身でやりとりを重ねることこそ、大きな価値があるのだ。最近ではAIの翻訳精度も著しく向上しているが、AIを通じてしかやりとりしようとしなない相手と、会ったときにハグしたくなるのだろうか。別れるときに固い握手を交わしたくなるのだろうか。手間や時間をかけ、時に苦勞して築いた関係だからこそ、心からのつながりが生まれる。交流の現場で本当に意味を持つのは、そうした試行錯誤の末に得られたものなのだ。

粉体工学会は、他の学会と比べても国際的な交流が活発だけでなく、個人と個人の忌憚なく、固い交わりが多いと感じる。これは、先達の先生方から脈々と受け継がれている文化であり、その先生方も試行錯誤をし、生身でぶつかりながら、道を切り開かれたのであろう。その流れに筆者も乗ることができたことは、何より幸運であったと思う。そしてその流れを後の人たちに伝えていかなければならないとも思う。

これから活躍する人々よ、どんどん外に出よう、異なる人と交わろう。自分に居心地のいいコミュニケーションしか取らなくなるとどうになってしまうかは、今の世の中を見れば明らかだ。上手く行かないことや、苦勞や、悔しいことがあったとしても、それはきっと自分の力となり財産となる。そしてその何倍、何十倍の楽しみが、そこには待っているはずなのだから。

〈著者紹介〉

2000年3月京都大学大学院博士後期課程修了、博士（工学）。工業技術院資源環境技術総合研究所、産業技術総合研究所、岡山大学を経て2023年同志社大学理工学部教授、現在に至る。2006～2007年リーズ大学客員研究員、2017年オーストラリア国立大学客員フェロー。

専門：微粒子間相互作用の直接測定、原子間力顕微鏡

* 連絡先 naishida@mail.doshisha.ac.jp